

知的書評合戦「第3回ビブリオバトルin八戸」

本の楽しさ思い思いに



出会いや生きる大切さ

入るように読んでしまった。あまり本を読むような性格ではなかったが、きっとこの「ねこ」に共感している部分があったんだと思う。自分の人生について考えた。ねこは死んでも生き返るけれど、私は生き返らない。かとなって怒っている時間がいかにもったいないかを考えさせられた。その後は、感情的になって怒ることも少なくなっていた。大学生になったある日、大学の図書館で課題のリポートを書いていた時、ふと本棚を見たら、

チャンプ本

「100万回生きたねこ」
 (佐野洋子著 講談社)

田沢 倭さん(22)
 二階上町、八戸学院大4年

この絵本を読み、子どもたちだけではなく私たちが大人に対して、出会いの大切さや生きる大切さを生きている時間大切にしなければならぬという話を、読む人の年齢に合わせて伝えてくれる本だ。と感じた。初めて読んだのは、高校1年生の時だった。図書館に行き、本棚をぶらぶらしていた時、本棚に置いてあった本が、たまたま目に留まった。

当時の私は、すぐにこの本が置いてあった。ことなりのやさしい性格で、何か気にくわないことがあったら、すぐ突っ掛かっていたり、物に当たったのに対して。お父さん、お母さん、おじいちゃん、おばあちゃんもみんな、学校の先生や周りの大人たちが大嫌いだ。どうしてこんなことにメッセージを出しているの、受け取ってくれないのかと思っていた。そんな私だったが、この本を手にとった時、食

この本が置いてあった。懐かしさを感じてつい手に取る。また食い入るように最後まで読んでしまった。

すると、高校の時には何とも思わなかったところが気になった。特に「ねこは自分がたりすぎでした」という部分に驚いた。

また、ねこは白ひめすね(こ)と出会い、初めて自分以外を好きになり、子ネコと一緒に暮らした。後、やがて死ぬこの隣で静かに動かなくなる。誰かを愛することの大切さや、生きろ素直に話を語ってくれていたのだと感じた。生まれたら、誰にでも「死」はやってくる。生きている時間に限りがあるからこそ、生きろや、人との出会いを大切にしなければならぬということも教えてもらった。

読む人の年齢に合わせて、さりげなく、でも心の奥に届くメッセージを送ってくれるのが、この本だ。3年後の私には、絵本がどんなメッセージを送ってくれるのか楽しみにしている。読んでみたところ、自分も、ぜひもう一度読んでみる。また何か違うメッセージが届くかもしれない。

決勝戦 詳報

知的書評合戦「第3回ビブリオバトルin八戸」の決勝戦が6日、八戸市のデーリー東北新聞社で開催された。青森、岩手両県の「チャンプ本」を懸けたファイナルリスト4人の発表と、特別ゲストの講演、デモバトルを詳報する。
 (取材班)

「第3回ビブリオバトルin八戸」決勝戦

▷日時	11月6日(日)
▷場所	デーリー東北新聞社6階メディアホール
▷特別ゲスト	高橋弘希さん(作家)
▷ゲスト	大久保勇人さん(伊吉書院)、及川晴香さん(木村書店)、小井川雅洋さん(カネイリ)
▷司会	大地球さん(BeFM)、三浦文恵さん(八戸学院短期大学)
▷主催	デーリー東北新聞社、八戸学院大学
▷特別協賛	日本製紙
▷協力	八戸市、八戸テレビ放送、BeFM
▷後援	ビブリオバトル普及委員会、青森県教育委員会、青森県図書館連絡協議会、青森県学校図書館協議会、岩手県教育委員会、岩手県図書館協会、岩手県学校図書館協議会